

〈第32回環境システム計測制御学会 (EICA) 研究発表会〉

全 体 報 告

環境システム計測制御学会 企画委員長

田 所 秀 之

(株)日立製作所

第32回環境システム計測制御学会 (EICA) 研究発表会を、令和2年10月30日 (金) オンライン開催にて実施しました。当初は、EICA 創立30周年記念事業とともに横浜市開港記念会館にて、10月29日 (木)～30日 (金) の2日間開催する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症感染拡大防止のため、オンライン開催に変更、また、会期は、当初予定を短縮、研究発表を中心としたプログラムとしました。

午前のオープンセッションは、当学会会長である清水芳久 (京都大学大学院工学研究科教授) による開会挨拶に始まり、仲田雅司郎副会長



オンライン 会長挨拶

(東芝インフラシステムズ(株)) から EICA30周年活動ならびに、永年 EICA にご支援・ご協力いただいている企業への感謝状贈呈に関する紹介、続いて田子靖章幹事長 (メタウォーター(株)) による表彰式の順で進行しました。

開会挨拶では、EICA の「顔をみながら、体温を感じながら、汗をかきながら、話をする。」という良さがオンライン開催では出にくいですが、オンラインの利点も採り入れながら、EICA の良い面をもっと増強し、with コロナ, after コロナと言わずに、「on コロナ」、コロナを征服して40年、50年と本学会を発展させていきましょう、との清水会長の力強い言葉が印象的でした。

続いての仲田副会長による、30周年記念事業紹介では、記念講演、記念誌「EICA30年のあゆみ」発行、感謝状贈呈、30周年記念座談会が紹介されました。

記念講演に関しては、EICA 名誉会員、古里明瑠氏による「EICA 設立30周年によせて (仮題)」が、令和2年度 EICA 総会の対面開催を中止したため、記念講演の開催を延期し、令和3年度総会時に改めて実施する旨が紹介されました。古里氏は、EICA 創成期よりご尽力されており、次年度にはなりますが、興味深い講演が期待されます。

記念誌「EICA30年のあゆみ」の紹介では、その内容紹介を通じて EICA30年の活動を振り返りました。“One Team「EICA」、楽しく役に立つ学会”，と記したスライドをはじめとして、最近10年を中心に振り返りました。この10年は、公共事業関係費の減少の影響で、個人・賛助会員数を減らしているが、2014年度からは増加に転じたこと、研究発表会の論文数も、ここ5～6年は安定していることが報告されました。また、調査活動として、2012年に「東日本大震災報告書」において現地調査を踏まえ、電気・計装設備にフォーカスしたユニークな視点から纏めたこと、2014年には「東日本大震災報告書Ⅱ」として、ハリケーンサンディとの比較検討等を実施したことを振り返りました。さらに、若手活動支援の「未来プロジェクト」についても触れました。近年、産官学の若手が闊達に意見交換する場が無くなってきている中で、本プロジェクトが意義ある活動である旨が、紹介されました。これまでの活動を振り返るとともに、新たな10年へ向けての思いを新たにできたと思います。

■ 記念誌発行

編集委員を構成し、本研究発表会に合わせて令和2年10月に発行。新たな取り組みとして、これまでの30年の長きにわたるEICA学会誌に掲載された論文等により、研究テーマの推移を整理しています。



記念誌発行紹介 (仲田副会長)

感謝状贈呈についても、贈呈は感謝の意を込めて、ぜひ対面で実施したいという願いから、今回は、贈呈企業を紹介することにとどまりました。しかし来年度には face to face で、改めて実施する予定です。感謝状は、概ね10年以上賛助会員として学会への支援、協力いただいた企業、17社に贈呈させていただきます。引き続きのご支援、ご協力をお願い申し上げます。

30周年記念座談会は、日本下水道新聞社のご協力のもと「環境分野におけるICT技術を通じて考えるSDGsへの取組み」のテーマで実施された事が紹介されました。座談会の内容は、日本下水道新聞2020年1月1日号に掲載されましたが、記念誌にも転載されています。

30周年記念事業紹介の締めくくりとして、仲田副会長は、「新型コロナウイルスで、人と人とのつながりの大切さ、コミュニケーションの大切さが認識された。これからも、会員のお互いの顔が見える学会として、新たな変化に挑戦してゆきたい。」とコメントしました。これからの活動に対する思いを新たにしたプログラムだったと思います。

オープンセッションの最後は、田子幹事長をプレゼンターとした表彰式でした。第一部の功績賞表彰式は、東京大学からWebライブ中継で味埜俊氏（東京大学東京カレッジ国際高等研究所 特任教授）に功績賞の賞状、記念品を田子幹事長より対面で、贈呈しました。

味埜氏は、2005年より、産官学の若手技術者・研究者のネットワーク形成の場である「未来プロジェクト」のディレクターとして10年以上ご尽力いただきました。本プロジェクトの卒業生は200名を超えており、現在、関連分野で活躍されています。味埜氏から、受賞の言葉として、「サステナビリティには、いろいろな人とつながって、いろいろな価値観に自分をさらすこと、そして、いろいろな考えを認めることが大切。新型コロナウイルスをとっていても、人によって症状に違いがある。違いを認めないことが社会の分断を作ってしまった。今後も、人のつながりをつくる学会として発展して行ってほしい。」とのエールを頂きました。なお記念品は、山ぶどうの木でできた籠を贈呈。味埜氏が愛好するワインを入れるのに丁度良い形状です。

表彰式の第二部は、令和元年度論文賞・令和2年度表彰式です。本表彰式では、東京大学からプレゼン

ターの田子幹事長、京都大学から、表彰状を贈呈する清水会長、そして受賞者と、リモートで3カ所を繋いでの実施となりました。受賞者の方々からは、オンラインで受賞のひとことを頂きました。今年度は、論文賞が1編、奨励賞が6編でした。

午後は、3分科会に分かれての研究発表会です。今年度も、上下水道をはじめとした水環境・廃棄物分野から、維持管理・エネルギー管理にいたる幅広い分野を対象として、26編の研究発表が実施され、活発な討論が実施されました。発表の内訳は、Aセッション、管理・制御分野が10件、Bセッション、分析・測定、汚泥処理/活用が各4件、Cセッション、浄水/産業排水処理、環境・エネルギーが各4件でした。

初のオンライン開催であったため、一部音声や映像の不調があったものの、ほぼ予定通りのスケジュールで実施することができました。「顔をみながら、～」のEICAならではの良さは伝わらないものの、スライドが見やすい、セッション間の移動が容易といった、オンラインのメリットを感じることができたのではないのでしょうか。

規模を縮小せざるを得なかったとはいえ、参加者は150名で、参加者の姿は見えないながらも、盛況な研究発表会とすることができたと考えております。準備ならびに当日の進行にご尽力いただいた実行委員、お手伝いいただいた会員の皆様、システムの運用を支えていただいた学生の方々に、この場を借りて感謝申し上げます。

最後になりますが、ニューノーマルの時代であればこそ一層、計測・制御への期待が大きくなっていくものと考えられます。そのようななかで、本研究発表会が、ささやかではありますが、皆様の今後の業務、研究・開発の一助となること、来年は「顔をみながら、体温を感じながら、汗をかきながら」の研究発表会を開催できることを祈念しまして、報告を締めくくらせていただきます。



閉会式後の記念撮影 ご参加ありがとうございました。